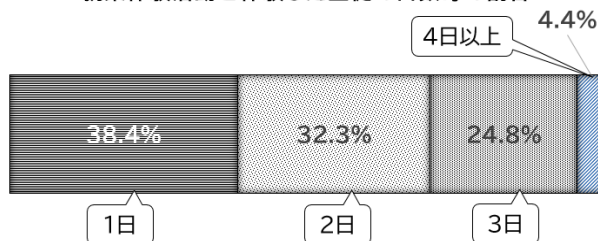


# 就業体験活動の充実

～長期のインターンシップ、デュアルシステム～

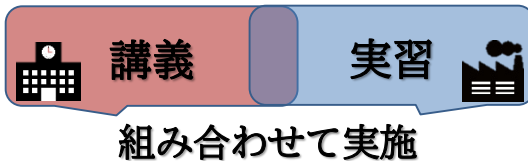
令和6年1月 北海道教育庁学校教育局 高校教育課

就業体験活動を体験した生徒の日数毎の割合



道教委「令和4年度インターンシップ状況等調査結果」

## デュアルシステムのイメージ



令和4年度に、インターンシップを体験した生徒の実施日数別の割合(全日制道立高校)は、1～3日間が95.6%、4日以上が4.4%となっています。国立教育政策研究所生徒指導研究センターが取りまとめた「職業教育・インターンシップに関する調査研究報告書」(平成19年3月)では、「実施日数が長かつ、開始年度の早いほど進路指導上の効果が高く、事業所側も効果を上げるためには長期化が望ましいと考えている。」と示されています。高等学校学習指導要領(平成30年告示)では、「長期間の実習を取り入れるなど」と、その意義や重要性を示しています。このことから、本リーフレットでは、長期間のインターンシップやデュアルシステムの実践例も含め、その意義や重要性を3つの観点から再確認します。各学校においては、効果的な就業体験活動の実施の参考にしてください。

### 観点①

#### 調査研究結果(長期間のインターンシップの効果)

国立教育政策研究所の調査研究報告書は、調査結果を踏まえ、以下のように報告しています。

- 5日以上実施した大学科は、5日未満実施の大学科に比べ、進路指導上の教育効果で優位となっている。
- 事業所側の担当者の60%以上は、インターンシップの効果を上げるための期間として、5日以上が適切であると考えている。

【参考(報告書からの引用)】

職場体験において、中学校と事業者両方にヒヤリングを行ったところ、職場体験5日間の成果は、『3日目から生徒が変わり、4日目から生徒が積極的・主体的に動き始め、5日目に人間関係が深まる』ということが報告されている。

出典:「職場体験・インターンシップに関する調査研究 報告書」(国立教育政策研究所 生徒指導研究センター)

### 観点②

#### 高等学校学習指導要領による取扱い

学習指導要領(平成30年告示)第1章総則第2款の3(7)には、「産業現場等における長期間の実習」の実習について、以下のように示されています。

キャリア教育及び職業教育を推進するために、生徒の特性や進路、学校や地域の実態等を考慮し、地域や産業界等との連携を図り、**産業現場等における長期間の実習を取り入れるなどの就業体験活動の機会を積極的に設けるとともに、地域や産業界等の人々の協力を積極的に得るように配慮するものとする。**

出典:高等学校学習指導要領(平成30年告示)

### 観点③

#### 取組実践校の声等

長期間のインターンシップやデュアルシステムを実践している学校の導入の理由や実施方法、取組による成果などを紹介します。

#### 標茶高校のインターンシップ



##### 【実施方法】

学 年: 2学年  
科 目: 総合的な探究の時間  
(地域探究)  
実習日数: 5日間(夏季休業前)

##### 【5日にした理由、メリットや効果】

就業体験としてだけではなく、「地域を知る」という目的も兼ねて実施しようと考え、この日数としました。この体験の中で、生徒は、地域企業が抱えている課題に注目できるばかりでなく、地域の魅力を再発見する生徒やアントレプレナーシップを学ぶ生徒なども出てきています。

また、日を追うごとに、企業の方々とのコミュニケーションが潤滑になり、1日目、2日目では深められなかった働くことの意義についても、学びを深めていった生徒が見られました。

#### 函館工業高校定時制のインターンシップ



##### 【実施方法】

学 年: 定時制課程4学年  
科 目: 位置付けなし  
実習日数: 38日(5月、7～8月)  
※授業に影響のない昼間の実施

##### 【受入事業所の声】

定時制課程の新卒採用実績がない中、学校から就職希望者がいることを伺いました。そこで、定時制課程の生徒を十分理解するため、企業としてもミスマッチをさせないために事務職から製造部門までの様々な業務体験を積んでもらいました。おかげさまで生徒さんは製造部門へ就業意思が固まり本社を受験していただき人材確保ができました。また、職場の従業員と協調性や業務に対しての責任感や使命感が向上し、職業観・勤労観を養うこともできたのではないかと思います。

## 静内農業高校のデュアルシステム



### 【実施方法】

学 年: 食品科学科2、3学年  
生産科学科3学年  
科 目: デュアル派遣実習  
(選択、学校設定科目)  
実習日数: 15日(5~10月)

農業高校と関連企業双方のハイブリッド型で人材育成を行うシステムとして10年ほど前から実施しています。

### 【体験生徒の声】

入学当初から「この牧場に行きたい」という強い気持ちがあったため、デュアルシステムを活用してこの牧場に行くことを決めました。実際に牧場に行くと、学校では経験できない作業の体験のほか、企業ならではの考え方を学ぶことができ、ここで働きたいと感じました。卒業後は実習先の牧場に就職することになりました。

## 鶴川高校のデュアルシステム



### 【実施方法】

学 年: 1、2学年  
科 目: チャレンジスタディ  
(学校設定科目)  
実習日数: 8日(10~12月)

講義形式による事前学習後、選択した企業で実習を行い、実習後は毎回、学校で振り返りを行っています。

### 【「実習」と「講義」の組合せによるメリットや効果】

講義で、職業知識及び現場のイメージをもってから実習を行うことで、社会人として必要な考え方やマナーはもちろん、仕事の内容についても深い学びになっていると感じています。また、実習後、すぐ学校で振り返りを行うことにより、次の実習に向けた新たな課題発見を行う学びのサイクルが効果的です。

## 旭川工業高校のデュアルシステム



### 【実施方法】

学 年: 3学年  
科 目: 企業実習  
(選択、学校設定科目)  
実習日数: 20日(5~6月)

学校設定科目「企業実習」で事前指導を8時間(4・5月)、事後指導を8時間(6・7月)実施しています。

### 【デュアルシステムを導入しようと思った理由】

実習期間を長く設定することで、「働くこと」に近い経験ができることや、学校では実習先の職業についての講義を行うため、より実践的な知識が深められること、実習先企業で必要となる技術、技能を習得することができること、社会人とのコミュニケーションを深める時間を多くとることができることから導入しました。



### 令和5年度就業状況調査の結果から

本道の新規就職者の卒業後3年以内の離職率(43.9%)が全国平均(37.0%)を上回っている(令和5年3月時点)状況を受け、道教委は、就職した生徒の就業状況などを調査。調査対象は、「就職指導の改善に関する研究」指定校における就職者。

早期離職を防ぐために、高校でも取り組むことが大切だと思うもの	
「受験前に職場見学に行くこと」	28.7%
「就職に対する意識を早く高めさせること」	16.0%
「インターンシップ等の体験活動を重視した指導を行うこと」	10.2%
高校で身に付けておけばよかったと思う資質や能力	
「コミュニケーション能力」	22.3%
「言葉づかいやマナー、身だしなみ」	13.5%
「勤労観・職業観等の価値観」	10.4%

取組実践校の「声」  
(下線部)の中で、  
身に付けられた  
資質・能力と一致する

## Q&A

- Q. 長期の就業体験活動は、教育課程上どのように位置付けているのでしょうか？
- A. 「総合的な探究の時間」や、専門高校においては科目「課題研究」の他、「企業実習」のような学校設定科目を開設して実施する学校もあります。取組実践校の例では、インターンシップでは2単位程度、デュアルシステムでは4~7単位程度、特別活動の一環として「学校行事」(勤労生産・奉仕的行事)で実施している学校があります。
- Q. 学校外において企業等が用意したプログラムを、就業体験活動等に単位認定する場合、必要なこととはどのようなことでしょうか？
- A. 単位認定する場合は、企業等との打合せの他、オリエンテーションの実施、計画書の提出、学校による事前・事後の適切な指導など、評価に必要な事項を実施することが望まれます。
- Q. 工業や農業、水産など、職業に関する各教科・科目においては、就業体験活動をもって実習に替えることができますが、その際の留意点はどのようなことですか？
- A. この場合は、その活動が各教科・科目の内容に直接関係があり、その一部としてあらかじめ計画し、評価されるものであることを要することが求められます。

## リーフレットに関する問合せ先

北海道教育庁学校教育局高校教育課キャリア教育指導係

〒060-8544 札幌市中央区北3条西7丁目 TEL 011 (231) 4111 (内線35-729)

<https://www.dokyojoi.pref.hokkaido.lg.jp/hk/kki/career.htm>

